

新型コロナウイルス感染のことでここしばらく、緊張と不安の中を私たちは過ごしております。最近、「国難」ということばも目にするようになりました。今は世界中の問題ですから国難というより「世界難」あるいは「地球難」と言った方が良いかもしれません。さて先月の 2 月 26 日（水）より教会のカレンダー上はレント（日本語で言うなら受難節）に入っています。四旬節とも呼ばれ日曜をのぞく 40 日間イエス・キリストの十字架の受難を思い見て、心整える期間でもあります。そしてイエス・キリストが十字架に金曜日にお架かりになる最後の週は特に受難週としてキリストの十字架を覚えて過ごし、三日後のイースター、復活祭を待ち望みます。

今日の箇所には主イエスがマルコ 8 章 3 1 節で「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならない」と受難と復活について教え始められたことが語られています。「人の子」というのは、主イエスがご自分のことを語る時にお用いになった言葉です。文字通り「人間の子」という言葉ですが、旧約聖書には、この言葉が救い主メシアを指すものとして用いられている箇所があります。そういう特別な意味を持ちながら、しかし文字通りには「人間の子」という意味の言葉なのです。主イエスがご自分のことをこの言葉で呼ばれたのは、そういう二重の意味を持つ言葉がご自分にふさわしいとお考えになったからでしょう。主イエスは神様の独り子であられ、救い主メシア、それをギリシャ語に訳せばキリストとしてこの世に来られました。しかし同時に主イエスは人間の母親から生まれ、私たちと同じ肉体を持つ一人の人間であられました。主イエスを見た当時の人々は、普通の人間としか思わなかったのです。そういうごく普通の「人の子」である主イエスが、神の独り子、救い主という特別な意味を持つ「人の子」である、それが聖書の教える信仰の根本です。そういう意味で弟子のペテロが、「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」マルコ 8:29 という主イエスの問いに対して「あなたは、キリストです。(救い主です)」と答えたあの信仰の告白は、まさにキリスト教信仰の根本を言い表していると言えます。人々は主イエスのことを、偉大な教師だとか、その教えには聞くべきものがあるとか、いろいろと評価している、しかしそれらの人々は皆、主イエスを「人の子」として、一人の人間としてのみ捉えている、しかし主イエスの弟子、信仰者は、クリスチャンは主イエスを救い主、メシアという意味での「人の子」であると信じるのです。

さて、本日の箇所で語られているのは、その「人の子」主イエスが、苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日後に復活するということを主イエスご自身が弟子たちに語り始められたということです。苦しみを受け、捨てられ、殺され、よみがえる、という四つのことが並べられています。主イエスは、ユダヤ人の長老、祭司長、律法学者という宗教的指導者たち、聖書の専門家たちによって、「価値のないもの、いらぬもの、いて欲しくないもの」として捨てられ、そしてさらに邪魔なものとして殺されてしまうのです。救い主である「人の子」主イエスはこれからそのような苦しみの道を歩もうとしている、ということが主イエスご自身の口から語られたのです。何気なく読み過ぎてしまいがちですが、ここで大事なことは「教え始められた」8:31 という言葉です。つまり主イエスご自身が苦しみを受け、捨てられ、殺されることをこの時から語り始めたのです。それまでは語られなかったそのことが、この時点から、しかも 32 節にあるように「はっきりと」語られ始めたのです。主イエスはもともとご自分が苦しみを受け、殺されることを意識しておられました、そのことを弟子たちに語り始めるべき「時」がよいよ来たのです。何によってその「時」が来たのでしょうか。実は直前に 27 節以下のペテロの信仰告白があります。主イエスこそキリスト、救い主であられる、つまり主イエスは単なる人間の子ではなくて、救い主である「人の子」であられるという、最も大事な、基本的な信仰が言い表された、そのことによって、主イエスの苦しみと死について語り始められるべき時が来たのです。なぜならば、主

イエスのキリスト、救い主としての働きは、苦しみを受け、捨てられ、十字架にかけられて殺され、そして三日目に復活することを通してなされるものだからです。苦しみと死を経て復活の栄光へと至る道こそ、主イエスが父なる神様から示されていた救い主として歩むべき道だったのです。主イエスが苦しみを受け、捨てられ、殺されるのは、成り行きでそうってしまったのではなくて、父なる神様のみ心によるのです。その神様のみ心を語っているのが、交読しましたイザヤ書53章です。自分は何の罪をも犯していないのに、民の救いのために身代わりになって苦しみを受ける。その苦しみと死とによって、罪の贖いがなされ、罪人に対する神様の救いが実現することがここに預言されています。主イエスは主にこの箇所を念頭に置いて、この受難の予告を語っておられるのです。主イエスが苦しみを受け、捨てられ、殺されるのは、それによって私たちの罪が赦され、神様による救いが実現するためなのです。

神様のみ心によって十字架の死へと向かおうとしておられる主イエスの道がここで初めて明らかに示されました。すると、それを聞いたペテロが、「イエスをわきへお連れして、いさめ始めた」というのです。日本語を読むと目下の者が目上の者に気を使いながらそれでも注意を与えているようなニュアンスがありますがここは直訳すれば「イエスを自分のほうに引っ張り出して叱り始めた」となります。気を使っているわけでも何でもなくペテロはイエスの手を取り、引き寄せて、「あなたは何ということをしやべってくれるんだ」と叱りつけているのです。どうしてそんなことをするのでしょうか？それは主イエスが、自分はこれから苦しみを受け、捨てられ、殺されるとお語りになったことを、ペテロが、そんなことがあるはずはないし、あってはならない、と思ったからです。主イエスがそんな暗い話をするなら、せっかく従っている我々の士気に関わるし従う気にならなくなるとペテロは思ったのです。主イエスは三日後の復活のことをも語っておられますが、これはペテロの耳に入っていないようです。おそらくこの時点では、復活と言われても何のことか弟子たちには分からなかったのでしょう。ペテロの心を占領していたのは、主イエスが苦しみを受け、捨てられ、殺されるということです。そんなことはあるはずがないし、先生にそんなことを言ってもらっては困る、と彼は思ったのです。何と大それたことをペテロはしているのかと私たちは思います。しかしこの箇所の最初に記されていますようにペテロがしっかりとした信仰告白、つまり「主イエスこそ救い主である」と告白出来たからこそ、主イエスはこれからの行く末の真実なことを話されたのです。ですから問題となるのは、救い主である主イエスがこれからのどのように働きをなさそうとしておられるのかということなのです。ペテロには、彼なりの救い主について思い描いていたイメージがありました。それは主イエスのおっしゃった、苦しみを受け、捨てられ、殺されるというのとは全く違うイメージでした。恐らく、そうではなくもっと栄光に満ちた、力強い救い主、敵を打ち破って勝利する救い主を彼は思い描いていたのでしょう。

救い主をめぐってこのような大きな意識のズレはどうして起きたのでしょうか？　こういうことだと思えます。ペテロは「主イエスこそ救い主である」という正しい信仰告白が出来たし、それを主イエスも受け入れて下さった。しかし、そのことによってペテロは主イエスのすべてが分かったつもりとなり、またそれは彼の弟子としての自信となったと思えます。しかしその自信によって、主イエスの間違いをも正してあげなければと思うようになったというわけです。同じようなことは私たちにもしばしば起るのではないのでしょうか。私たちも、主イエスを信じる信仰を与えられ、それを告白して洗礼を受けました。その信仰告白は、神様の導きによって、聖霊の働きによって与えられたものです。しかしそのように信仰を告白したとたんには自分はもう主イエスのことを、神様のことを、全部ではないにしてもほぼ分かった、と思ってしまうということです。神様の恵みとはこういうものであり、主イエスによる救いとはこのようなものだ、教会というのはこういうところなんだと分かったような気になり、自分の勝手な思い込み、偏見に過ぎないことを、神様から示された真理と勘違いして、今度はそれに捕われてしまう、ということが起

るのです。

このことは、私たちが信仰において考えておくべき大事な問題を指し示しています。それは「信じる」ことと「分かる」こととの関係です。信じるとは、ある意味では「分かる」ことです。神様の恵みが分かり、主イエスによる救いが分かるから信じるのです。「分かる」ことなしに信仰はありません。しかし「分かる」ことがすべて信仰に結びついているわけではありません。「あれも分かった、これも分かった」と、次第に分かることの量を増やしていくことによって信仰が深まるわけではないのです。私たちが「分かる」というのは、ある意味において危険なことです。何故なら、私たちは自分が分かったこと、分かったと思ったことに捕われてしまう傾向があるからです。自分が分かったこと、分かったと思ったことから自由になれなくなるのです。しかし本当の信仰とは、神様によって常に新しく分らせていただくことです。新しく分らせていただくことによって、以前「分かった」と思っていたことは打ち砕かれるのです。そういうことの繰り返しが真実な信仰者の歩みです。それを別の言い方では「神のみことばによって常に改革される」と言うのです。その意味は、神様によって常に新しく分らせていただき、それによって変えられていく、ということです。この姿勢を失ってしまうと、私たちは、自分が分かったこと、分かったと思ったことに捕われて、ペテロがそうであったように、主イエスご自身の言葉をも受け入れず、それは間違っていると思うようになってしまうのです。私たちは、自分は主イエスをいさめるような大それたことはしていない、と思っているかもしれませんが。しかし知らず知らずのうちに主イエスに向かって、礼拝とはこういうものですよ、教会とはこういうものですよ、クリスチャンはこうでなくちゃと教えいさめているかも知れません。そのような中で注意しなければならないことばとしては「世の中ではそうはいかない」「神は私のことをこう思っているに違いない」といったことです。

主イエスを引き寄せ、叱ったペテロを、主は逆に厳しくお叱りになりました。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。サタンとは、人を罪へと誘い、神様の恵みから引き離そうとする力、いわゆる悪魔のことです。つまりペテロは主イエスから「お前は悪魔だ」と言われてしまったのです。しかしこれは主イエスが、ペテロのことを悪いやつだと言っておられるのではありません。ペテロの問題は何でしょうか？ それは 33 節の「神のことを思わないで、人のことを思っている」ことでした。「神のこと」それは神様が聖書のみことばにおいて語っておられることです。「人のこと」それは自分の思い、自分が「分かった」と思っていることです。神様のみ言葉に聞くよりも、自分が分かったと思っていることに固執している、それが主イエスをいさめたペテロの姿なのです。そしてペテロはそのことに気づいていません。これは神様が分かったつもりでいる私たちも善意によって思ったり、言っていることが実は神様のみ心に敵対する悪魔的な働きとなる危険性があるということです。ですから主イエスは続けて「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」34 節とおっしゃったのです。主イエスの後ろにつき従い、主の示して下さる道を歩んでいく者こそ弟子であり、信仰者です。信仰者は、自分が分かったことによって歩む者ではありません。信仰の歩みにおいて主イエスの恵みが、神様の救いの素晴らしさが分かるようになることは祝福であり喜びです。しかし私たちは、その喜びと驚きによって歩むではありません。それらを分かせて下さったお方である主イエスに従っていくのです。その方が、さらに新しいことを、もっと豊かな恵みを、もっと大きな喜びを分かせて下さることを求めつつ歩むのです。そのために、自分の固定観念にしがみつくことなく、それを捨て去りつつ歩むのです。社会状況が不穏な中にありますがもうすぐ 4 月、新しい事業、学業の新年度を迎え、新しい思いで歩み出そうとしている私たちは、主イエスの後に従う弟子として、自分の分かったことに固執することをやめて、主が連れて行って下さる所にはどこにでもついていく、そういう身軽さを身に着けて信仰者としての日々を送りたいと願われます。